

羽衣の松

遊歩道計画変更を検討

静岡市が近く説明

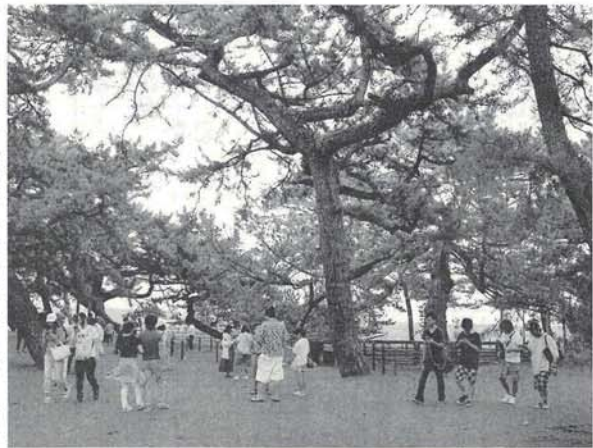
世界文化遺産「富士山」の構成資産の一つ、三保松原(静岡市清水区)のシンボル「羽衣の松」の周辺にボードウォーク(木製遊歩道)を設置する計画について、市が場所や形状などの変更を検討していることが分かった。市は近く新しい設計方針を決め、地元を説明する。市は2017年度の完成を目指し今年5月に着工する予定だったが、地元住民や県が「松に悪影響を及ぼす恐れがある」と懸念を示したため、計画は事実上ストップしていた。【長谷川隆】



「羽衣伝説」で知られる羽衣の松は推定樹齢約250年で、駿河湾に面し約3万本のクロマツが群生する三保松原の象徴的存在。2013年6月に世界文化遺産に登録される以前から年間60万〜70万人の観光客が訪れていたが、登録後は急増。13年度は約150万人、14年度も約100万人が足を運んだ。ところが羽衣の松は、数年前から葉の数が減少し黄色に変色するなど、樹勢の衰えが進んだ。市は「急増した観光客が近くを歩くため、地面が踏み固められたのも衰えの原因」と判断。15年度から3カ年計画で、総延長約1200m、最大幅約4mの木製遊歩道を設置することを決めた。総事業費は約1億8500万円、今年1月には文化庁の許可を得ていた。

ところが5月の着工を直前に知った地元住民が「遊歩道が大きすぎる」などと反対を表明。それを受け県も「遊歩道で風や砂の流れが変わり生育に悪影響を与える可能性がある」として、着工を延期し規模や位置の見直しを市に求めた。

市は、影響はあっても軽微として遊歩道は必要という方針を変えたい。だが、完成予定は当初の計画より延びる見通し。美濃部雄人・副市長は「設置場所が変えられても羽衣の松が見える範囲内になる」との見通しを示した。



柵で囲まれた羽衣の松の近くを散策する観光客ら—静岡市清水区三保で

地元の理解不透明

遊歩道計画が見直しを迫られた背景には、「自然のままの状態を優先すべきだ」と望む地元住民と、「松の保全と活用など多様な要

求を満たしたい」と考える市との価値観の違いがある。市は遊歩道の手すりの高さを低くし、設置位置も当初計画より松から遠ざけるなど景観や環境への影響を最小限に抑える変更を検討しているが、地元の理解を得られるかは現時点で不透明と言える。

組むNPO法人「三保の松原・羽衣村」の遠藤まゆみ事務局長(58)は「羽衣の松の景観は『一つの絵』。人工物の設置はなじまない。富士の名勝地として、自然のままの姿を後世に残したい。市民だけでなく、大勢の人にこの問題について考えてほしい」と訴える。

遊歩道計画については、地元で丁寧な説明がなかったという声も上がっている。近くの男性(59)は「今年5月、県が着工に待ったをかけたというニュースをテレビで見ると計画については何も知らなかった」と戸惑いを隠さない。

市の担当者は「自治会長ら地域の代表者に事業概要について年2、3回説明していた」と釈明。「新たな方針が決まったら、地元と丁寧な話し合いを重ねたい。地元から出た意見は(できる範囲で)計画に反映させたい」と話す。

真摯に議論を
富士山や源兵衛川(三島市)などの再生保全活動に取り組むNPO法人・グラウンドワーク三島の渡辺豊博専務理事(都留文科大特任教授、富士山学)の話。文化遺産の利活用と保全をどう図るかということはしばしば問題になる。行政やNPO、住民ら関係者が真摯(しんし)に議論すべきだ。三保松原は地元の協力なしに守れない。できるだけ地元の声に沿った方法で保護・保全を図ることが望ましい。観光客には松から少し離れて見てもらうなど、解決策はあるはずだ。静岡市の文化遺産に対する考え方が問われている。